

宋代禪籍逸書序跋考(二)

石井修道

二語録類(承前)

- (25) 雲門録序(永詢)(口雲門宗の補)
- (26) 湛堂準禪師語録序(文準)(一一一六)(ハ臨濟宗黃竜派の補)
- (二) 臨濟宗楊岐派
- (27) 保寧勇禪師語録序(仁勇)(一〇七八)
- (28) 太平興國堂頭璨公語録(了璨)
- (29) 此菴浄禪師語録序(守浄)(一一五九)
- (30) 仏照禪師語録序(徳光)(一一九七)
- (31) 天童無用禪師語録序(浄全)(一二〇八)
- (32) 聡老語録序(元聡)
- (33) 元谷禪師語録序(宗)
- (34) 能侍者編無準語録序(師範)
- (35) 悟書記小藁序(円悟)
- (ホ) 臨濟宗その他
- (36) 東山長老語録序(居夷)
- (37) 石門進禪師語録序(守進)

- (38) 翠巖真禪師語録序(可真)
- (39) 大瀉喆禪師語録序(慕喆)
- (40) 燈禪師語録叙(智燈)
- (41) 智京語録序(智京)
- (42) 太原昭禪師語録引(昭)
- (ハ) 法嗣不詳
- (43) 寧国長老語録序
- (44) 徳瀾禪師語録序(徳瀾)
- (45) 方広誉老語録序(従誉)
- (46) 跋尼光語録(光)
- (47) 題西峯豁禪師雜録(雲豁)
- 三拈古・頌古集その他
- (48) 拈古頌序(趙扑)(一〇七四)
- (49) 空巖頌集序
- (50) 賀知無聞頌軸序(知)
- (51) 悼阡弁山頌集序(了阡)
- (52) 石屏頌集序

(53) 嵩和尚頌序(嵩)(一二五四)

(54) 槩菴居士文集序

二語錄類(承前)

(25) 雲門錄序

道之概、及言而顯、言之微、至書而畧。然概而不得不強者道、粗而不得不謂者言、畧而不得不著者書、忘言之言、未始有言也、可道之道、未始有道也。故雖終日示吾境、鳴吾喙、汗吾簡、我何累哉。若大士永詢者、其有言而無累歟、惟師得于禪師善善承寬、寬繼雲門、雲門于法最先覺者也。夫得無所得、是名得法、覺無所覺、是名先覺。故師以景祐竜集乙亥、即荊南福昌寺、甫坐道場。天駒玉象、蹴踏群勢、黑白咨求、悅而承風、一緣万応、無有中畔。故其語非牽合屬綴、非紛沢華藻、順俗悅凡、独妙逗機、欲令昧者得入、知者怪悟、空文多言者、無所旁縁。自唐以来、斯道遂頽、諸老大乘更提而迭唱之。高足上首、奔走譔集。蓋別行一趣、不得而闕。今道隆所録、亦由是乎。若乃憑默遺言、默境已立、用遣遺默、遣情弥熾。如我説者、物至則応、不為言言、理解而止、不為默默、言以交薦、不為遣遣、円裏妄真、以合大方。曩之為雲門、為寬、為善、今之為師。一用是説、無二道焉。齊安守史館麻君方之、契師道縁、間不容翮、哀録抵僕、且俾序辭、僕晚聞道、姑著師出世之自、道隆述者之意、方之見託之重、以冠篇端、亦不知言為録之耽贅歟。録且待耽贅而足歟。広平宋某子京記『景文集』

卷四五—一九丁右—二〇丁右(四庫全書珍本別輯 駒図032—20—2249)

宋祁(九九八—一〇六一)の『景文集』六十二卷に所収された一文である。福昌永詢とは、『建中靖国統燈録』卷三(統藏経卷一三六—三五〇)に一間答が知られるのみであるが、序文にも示されているように、雲門文偃—双泉師寛と承ける福昌重善の嗣法の弟子である。師の住持地の荊南(湖北省江陵県)の福昌寺に、景祐二年(一〇三五)に住持したことがわかる。麻方之や編者の道隆については不明である。『雲門録』といえ、すぐに守堅編集になる『雲門匡真禪師広録』三巻を思い出す。ただこの文偃の語録は、福州鼓山の円覚宗演の校勘版が知られているが、それものとずいた蘇解が熙寧九年(一〇七六)に序文を撰したものと版以前に、この『雲門録』が成立している点は、注意してよいと思われる。雲門の名が、永詢の住持地から来たものか、雲門文偃の法系を代表する意味で付されたものかについてもよくわからない。

(26) 湛堂準禪師語録序 日涉園李彭

予觀宗師説禪、嘗譬之善琴者、斲以百衲之材、絃以園客之絲、資以敏妙之失、其攫之也深、其醅之也愉、上為南風、下為別鶴、可謂尽矣。曾不知絃指之外、徽軫所不能管攝、有不可伝之妙。又嘗譬之善奕者、枯碁三百、鏖戰於方野之間、或角或拵、出奇決勝。可謂備矣。曾不知陷之死地而後生、殺之亡地而後存。有不可料之著、出人意表。本分宗師、心空法徹、得大自在、窠臼不存、亦何以異此哉。昔真浄禪師、出臨済正宗、

得雲門大用。而湛堂老人、実世其家、悟活祖師意、兩坐道場。発微軫不能管攝之音、下出人意表之著。未嘗貶剝諸方、羈縻禪子。而學者向風爭趨之。諸方宗匠、共所推仰。真祖師門下之英豪、菩提場中之宿將也。及其遷寂、参徒志端、編掇平時上堂警衆機緣、將□□□世、開鑿後人。以予嘗瞻礼杖屨、獲聴妙談。乞為序引於卷首。予辞以丘園病夫。豈発揚潜德之具。端曰、若欲借重於名郷巨公、以伝世而行後、非先師意也。吾雖不死、振先師之遺風、其敢負先師意乎。公毋固辞。予曰唯。乃序以冠之。政和六年六月七日序。(『統古尊宿語要』卷一。統藏經卷二一八—四三六c d)

序の名は仮に『仏法大明録』(拙稿『宗門統要集』について(上))参照)よりつけたものである。序を書いた李彭には『日涉園集』十卷(『四庫全書珍本別輯』所収)が現存するが、この序文はみいだせない。序は政和六年(一一一六)六月七日に成立したものである。『統古尊宿語要』所収の語録は、拔萃であつて、語録全体は不明であるから、逸書として取扱つた。湛堂文準(一〇六一—一一一五)は、黄竜慧南—真浄克文と承ける黄竜派の禅者で、覚範徳洪(一〇七一—一一二八)と兄弟弟子である。その徳洪が、『石門文字禅』卷三十に「泐潭準師行状」を撰しているが、語録については述べない。文準の示寂は、政和五年の七月二十二日であり、序文はその後一年もたたないで成立しているのに述べないのは不思議であるが、語録が存在したことは『仏法大明録』などで知られていたものである。編者志端は名前を知られないが、『続伝燈録』卷二十六の目録にある光孝智端禅師(大正蔵卷五一

一六四二c)と同一人であろうか。文準の語は、『統古尊宿語要』からみれば、雲巖と泐潭の住持地の記録があつたと思われる。また文準は、大慧宗杲に圓悟の参学を勧めた人であり、文準示寂後、大慧が文準の塔銘を張商英無尽居士に求めた点などは、別稿で述べたところである。

(二) 臨濟宗楊岐派

(27) 保寧勇禅師語録序 無為子楊傑序

鳳堂山老、南方游行時、至楊朱泣岐処、遇一善知識。白雲蒙頭、師子踞坐、以金圈栗蓬、為仏事、布施十方學者。云、鉄罍山可透、吾金剛圈不可透、大海水可吞、吾栗棘蓬不可吞。若透一圈、即百千万億圈、透之無礙、一切煩惱、於此解脱。若吞一蓬、則百千万億蓬、吞之不疑、一切功德、於此成就。時諸比丘、罔然退席、莫知所措。彼上人者、従容道場、独蒙受記、後十五年、鳳臺山頂、震大雷音。三草二木、均霑一雨。其徒録其語、請無為子、以序之云耳。時皇宋元豊元年、清明日述。(『統古尊宿語要』卷三。統藏經卷一一八—四七八a b)

序文を書いた楊傑には、『無為集』十五卷があるが、その中にはこの序文はない。楊傑は『嘉泰普燈録』卷二十二に立伝されており、天衣義懷(九九三—一〇六四)に嗣法し、芙蓉道楷(一〇四三—一一一八)とも交際があつた人である。この序文は、元豊元年(一一〇七八)の成立である。保寧仁勇は、楊岐方会の弟子であり、詳伝は不明で、建康府保寧寺で、二十余年活躍したといわれる。ここも『統古尊宿語要』により、序文をかかげた。

(28) 太平興國堂頭璨公語錄

仏菩薩語、流布人間、凡五千四十八卷、而一祖西來、直指心源、不立文字。若仏若祖、孰少孰多、曰教曰禪。若此殊軌、殊不知、仏菩薩語、雖累億萬、亦未嘗輒立文字、而達摩直指心源、雖默無一語、而五千四十八卷、已在其中矣。太平堂頭璨公、頃從蔣山、何嘗得免、昔住太平、本自亡錘。拋師子座、作師子吼、未嘗為人世、說毫釐法、四方學者、皆腦門点地、拾其殘膏、而襲藏之且扣。栴檀居士鄧某、湖南之鴻儒、以序冠焉。居士曰、嘻、此特其土苴耳、豈其真哉。雖然土苴之外、何者為真、一視而空頭頭、皆是有語亦可、無語亦可、雷聲・淵默、本自同時。孰為五千四十八卷、而孰為不立文字者乎。在仏為弟子、在祖為嫡孫。蓋道一也、門人弟子。若因此以有悟、則警歎動息、皆西來意、而況所揚之般若乎。若守此以求師、則拈花微笑、已是剩法、而況所論之葛藤乎。悟之者、天地一指、守之者、毫釐千里。反以問師了無語焉。余姑為門人者序之耳。師名了璨。得法於蔣山勲。其祖蓋出於楊岐之下、作字吟詩、皆得遊戲三昧、而未嘗作意也。大丞相李公、嘗訪師於栖雲悅之許、為具眼人。遂結看經社、世人因以多師。嗚呼、師豈止具眼看經而已耶。当有弁之者。〔栴檀集〕卷二五―五丁右(六丁左)(四庫全書珍本四集 駒図032-20-1462)

栴檀居士鄧肅(一〇九一―一一三二)の『栴檀先生文集』十六卷に所収の一文である。『太平興國堂頭璨公語錄』については、い

ままで知られていないものである。序文中にもみられるように諱を了璨といい、仏鑑慧勲(一〇五九―一一一七)に嗣法した人で、『嘉泰普燈錄』卷十六等では、泉州(福建省)の羅氏の子として生まれ、漳州(福建省)の浄衆寺に住し、仏真禪師といわれたということしか知られていない。蔣山で嗣法し、師と同じ舒州太平興國寺に住したことがわかる。また栖雲悦(不明)のもとにもいたとされる。序文からは、教禪一致の主張が推測されるが、卷数、内容等については不明である。

(29) 此菴浄禪師語録序

予於叢林中、聞浄老名旧矣。流離憂患、恨未及識之、今其死矣。吁可傷哉。妙臾禪者、手其語録一編。求予為序。余一読之、信楊岐的孫、而徑山嫡子也。且道、於什麼處見得。咄。見成公案、放汝三十棒。咄。紹興己卯四月朔。無垢居士張九成書。〔続古尊宿語要〕卷五。続藏經卷二一九―三六b)

張九成(一〇九二―一一五九)は、字を子韶といい、自ら無垢居士と号し、また横浦居士とも号す。『嘉泰普燈錄』卷二十三に立伝され、大慧宗杲(一〇八九―一一六三)に嗣法す。張九成は主戦論者で、大慧が、張九成との親交により、衡陽に流罪になることは有名である。張九成には、『横浦先生文集』二十巻が存するが、この序文はそこにはないので、これも『続古尊宿語要』よりかかげた。この序文は紹興二十九年(一一五九)に成立している。此菴守浄は、序文にもあるように、大慧宗杲の弟子であり、序を依頼したのは、妙臾という。『語録』一編とあり、分量は不明で、泉州雲門庵、福州の東禪寺、西禪寺の上堂が記録されてい

たと思われる。

(30) 仏照禪師語録序

拙庵禪師、以仏法、際遇孝宗皇帝、問答之語、既刻金石、伝天下久矣。晩菴居阿育王山中。其徒相与尽哀。五会所説法、凡数万言、為五卷。遣侍者正球走山陰沢中、請某作序。某曰、拙庵之道、棟梁大法、無語可也。拙菴之語、雷霆百世、無録可也。又何以序為哉。然五会之外、別有一会、数万言之外、別有一句、是可録、是不可録。諸人試下語。若也道得、老農賛歎有分。慶元三年九月壬子。陸某謹序。(「渭南文集」卷一四一五丁右(左)(四部叢刊 駒図032-T12-222))

陸游(一二五—一二〇九)の『渭南文集』五十卷に所収の一文である。仏照徳光(一一二—一二〇三)は大慧宗杲(一〇八九—一一六三)の嗣法の弟子で、日本達磨宗の大日能忍の印可証明者として知られている。拙庵は徳光の自号であり、仏照は淳熙四年(一一七七)の正月二十四日に賜った禪師号である。仏照徳光の伝記は、『平園統藁』卷四十にある周必大(一一二六—一二〇四)が撰した「圓鑑塔銘」が詳細で、すでに拙稿「仏照徳光と日本達磨宗——金沢文庫保管『成等正覚論』をてがかりとして——(上)(下)」「(金沢文庫研究)二二二・二三三号 昭和四十九年十一月・十二月」で述べたことがある。塔銘にも『語録』の存したことを述べるが、現存しない。序文にある孝宗皇帝との問答の語は『古尊宿語録』卷四十八所収の『仏照禪師奏対録』であり、陸游の序文は五卷本の『仏照禪師語録』に対するものである。この語録は五会の説法を集めたもので、伝記より五会とは、台州鴻福・

台州報恩光孝寺(天寧広孝寺)・靈隠寺・明州阿育王山広利禪寺・徑山であることがわかる。現在、『統古尊宿語要』卷五に「仏照和尚語」を載せるが、この語録は、徳光が自称して、「鴻福・光孝・靈隠・育王・徑山」の五つをすべて収録しているし、台州光孝入院上堂および靈隠開堂があるので、まさに『統古尊宿語要』所収本は、五会の語録の全体の抜萃である。ゆえに陸游の序をもつ語録五卷の全体は現在知られないが、その一部分が伝っているといえよう。陸游が序文を書いたのは慶元三年(一一九七)九月壬子(十二日)で徳光の生前にあたるが、最後の徑山に住したのが紹熙四年(一一九三)正月二十五日であり、序文にも述べられているように、慶元元年(一一九五)は育王に還って東庵に帰老していた時である。ゆえに五会の語録が、序文の書かれた時点で完結しているが、よいと思われる。徳光の弟子は、十八人が知られているが、侍者正球については不明である。

(31) 天童無用禪師語録序

處義一画、発天地之祕、迦葉一笑、尽先仏之伝。浄名一黙、曾点一唯、丁一牛刀、扁一車輪、臨濟一喝、徳山一棒、妙喜一竹篋子、皆同此関捩。但恨欠人承当。天童無用禪師、蓋卓爾能承当者、未見妙喜、大事已畢。豈有住山示衆之語、可累編簡哉。放翁謂、若不投之水火、無有是処。惟韓退之所云火、其書其語、差似痛快。又恐退之亦止、是説得耳。五百年後、此話大行。方知、無用与放翁、却是同参。嘉定元年秋九月丙辰序。(「渭南文集」卷一五一七丁左(一八丁左)(四部叢刊 駒

図032-T12-222)

同じく陸游の一文である。無用淨全（一一三七—一二〇七）も大慧宗杲の弟子であり、『天童寺志』巻七に錢象祖の撰した塔銘が存し、この序文も『天童寺志』巻八に所収されている。塔銘に語録の存することは述べてはいるが、分量など不明である。序文中にある放翁とは陸游の自号であり、陸游晩年の嘉定元年（一二〇八）九月十九日に序文が成立している。淨全は前年の六月二十九日に示寂しているが、天童山の住持は、拙稿「明末清初天童山と密雲円悟」（駒沢大学仏教学部論集）六号・昭和五〇年十月）で考えように一二〇〇年頃住持して、示寂するまでであり、そのために天童の名が冠せられたものであらう。淨全は狼山に出世し、蘇州の承天寺、宣城の広教寺、建業の保寧寺に住している。塔銘の成立は、淨全の弟子の盤山思卓（一二二一年示寂）の努力によるが、語録についての成立事情、内容は不明である。

（32） 聡老語録序

余頃投間、門可羅爵、有僧以径山聡老書、來求寺記、甚勤、再三辭之。不惟与聡無半面、身隱言遜、何能属文。径山之名、甲于東南。一燔之後、欲興瓦礫為宝坊。両宮賜予、檀施山委、旧觀鼎新。又大過之、宜得玉堂金閨之英、為之登載。顧乃訪老朽于寂寞之浜、何耶。僧曰、寺倚神竜為命、率衆致禱、肝嚮昭答、欲以属公。余感其意而為之辭、晚帰朝行、始与之識、退然老衲也。再相過、忽已亡矣。其徒集六会語刊之、求序。余不能学仏、莫知師之所至。但見臨濟楊岐之下、曰白雲端、曰五祖演、曰仏眼遠、皆古德之光明傑特者。遠伝行雪堂、行伝光晦菴、以及師。其相付嘱、又非他人苟然之比。光将示寂、

宋代禅籍逸書序跋考（一）（石井）

以行所付法衣・集衆書偈、以授師。偈曰、再來毒種、元聡侍者。巨耐吾宗、滅汝辺也。我今高枕百無憂、聡子時搥塗毒鼓。叢林遂有毒種之、称聚徒説法三十年。自雪峯來此山、法席大振。復成金碧之区、人謂為国一後身、則師之所得者可知矣。読者其自参之。（『攻媿集』巻五三—二〇丁右—二二丁右）（四部叢刊 駒図032—T12—217）

楼鑰（一一三七—一二二三）の『攻媿集』百二十巻に所収された一文である。『攻媿集』には、多くの禅宗関係の記事があり、その一部を拙稿『『攻媿集』にみられる禅宗資料——投子義青の法系を中心として——』（東方宗教 第三十九号・昭和四七年四月）で紹介したものである。聡老とは、序文中にもあるように、仏眼清遠—雪堂道行—晦菴慧光と承ける蒙菴元聡（一一三六—一二〇九）である。元聡は賜号を仏智禅師といい、衛涇が撰した「径山蒙菴仏智禅師塔銘」（『後樂集』巻一八所収）に伝記は詳しい。元聡は径山に住して後、火災によって灰燼に帰した径山を復興した点は、すぐれた功績であり、序文の最初にもふれるが、楼鑰が同書巻五七に「径山興聖万寿寺記」を記して強調するところである。六会の語録とは、雲居・平江の承天・常州の華蔵・真州の長蘆・雪峰・径山をさすと思われ、初住は隆興光孝寺であり、その後、饒州の薦福寺、撫州の漕山、洪州の宝峯寺の請を受けたが、住さなかったという。住持の期間が、すべてにわたってわからないので、六会は初住地を含んでいるかもしれない。径山および元聡については、別の機会に述べたい。

（33） 元谷禅師語録序

慧日目・齒兩種、不壞之藏、既銘之矣。越二日、復見此錄、此老臧心不施、心苗發生、以無作有、脫間漏架、如猩猩履、如刃上蜜。又如深穽、文錦蒙羈。其曾中毒、故能中人以毒、曾落穽、故能陷人以穽。吾於是泄其密機。使觀者、知需水蠱室、毋飲涓滴、破絮敗繒、勿行棒棘、康達八達、平等超越。

〔北磻集〕卷五——一九丁左——二〇丁右(四庫全書珍本二集 駒図032—20—707)

北磻居簡(一一六四——一二四六)の『北磻集』十卷に所収された一文である。序文の最初に述べる塔銘は、同書卷十の「慧日宗元谷目齒兩種不壞之塔銘」(一一五丁左——一六丁右)に収められている。塔銘には「信州周氏の子なり。月崑新興寺僧守忠に受業す。吾が仏照に末後の句を得て慧日に敷門し、万寿の西堂に帰隱す。遂に此に蛻す。年、六十六、臘四十二なり」とある。慧日に敷門とは、閉關したことを思われ、仏照徳光に嗣法したかどうかは不明であるが、仏照のもとでさとした人であろう。居簡は仏照の嗣法の弟子であり、元谷が嗣法していれば、兄弟弟子であろうが、燈史類には記載されていない。禪定力の不思議をたたえたのであろうが、示寂後、闡維したが、目や齒はこわれなかったという。そのような点は、すでに大慧宗杲が批判したところであり、大慧派の禪者としてよりも、怪僧、神異の僧と受けとられたのであろう。

(34) 能侍者編無準語錄序

円照之道、如春行天地。万物咸被其沢、華而為草木、動而為蜚鳴、媚而為山川。盖其迹之可見也。写生像真、巧状妙似。又其迹之相似者也。嗟夫以迹而觀春色、造物已不幸矣。即其

似者而觀之。又何其大不幸也。^(能侍)然伝者久在薰陶块圯中、化機生意染肺腑。故華而草木、動而蜚鳴、媚而山川。状其本真、無二無別。因告之曰、似則似矣。無乃包裹春風耶。(『柳塘外集』卷三——一四丁右左)(四庫全書珍本五集 駒図032—20—1888)(参照「無文印」卷九)

無文道璨(一二七一年寂)の『柳塘外集』に所収の一文である。

無準とは、無準師範(一一七七一——一二四九)と思われ、道璨は無準の詳細な行状をも選している。正統藏經中に『無準師範禪師語錄』五巻と『無準和尚奏対語録』一巻が所収されているが、編者の侍者名は、宗会・智折・覚円・如海・妙倫・惟一・了禅・了心・普明・了南・招曇・了覚・師坦・妙因・至慧・了垠の名がみいだせるのみで、能侍者については不明である。燈史類にも無準の弟子としてみいだせない。正統藏經中の語録は、無準の語録として全般的に整理され編集されているから、この序文という語録は、大部ではなく、ある特定の寺院の記録か、内容が法語・普説・偈頌など何か限られたものではなかったかと想像される。あるいは拔萃の再編語録であろうか。

(35) 悟書記小藁序

悟上人、吾鄉儒家子、習氣未忘、酷好詩而喜為文。向為偃溪径山掌記、謁余西省。嘗以數語贈之。今南歸寓朋山、所作愈富。又寄以二編名曰枯崖。且援信無言、例以求序曰、信為仏日記室僧、小暇不入園、鋤菜即下田、使牛有集、曰園夫。持示徐師川。師川序之、易名奇葩。余曰、皮毛剝落、葉尽帰根、

是為汝宗本色、貫花散花皆病也。師川此名母乃病之乎。使悟而遇師川、必曰、枯者芽矣。余因自思少亦喜、吟老無所入。乃独誦翫味心珠証道。諸歌人多閱保寧・雪竇諸老頌古、亦時有此作。或者正以逃禅譏之。然則余以書生而喜古尊宿言句。悟以衲子而弄窮秀才生活、恐彼此皆病也。昔魯公扈・趙齊嬰問疾於扁鵲。鵲謂公扈曰、汝多於謀而寡於斷。謂齊嬰曰、汝少於慮而傷於專。是為偕生之疾。若換汝之心、則均於善矣。遂飲二人迷酒、剖胸探心、易而置之、投以神藥、既悟如初、其疾皆去。世而有扁鵲。其人余願請之、俾易吾与若之、心使運使、談禅臨濟孫說文章、各去其病。庶無攙行奪市之、疑則而得之矣。上人以為如何。〔竹溪鬳齋十一稿統集〕卷二一一二丁左〜一二丁左（四庫全書珍本二集 駒図032-20-715）

林希逸の『竹溪鬳齋十一稿統集』三十卷に所収された一文である。悟書記は、大慧宗杲―仏照徳光―浙翁如琰―偃溪広聞と承ける人で、枯崖円悟と呼んでいる。序文中にもある『枯崖漫録』三卷（ここでは二編とあるが）の撰者である。徐師川つまり徐俯（一〇七五―一一四一）と仏日禅師大慧宗杲の記室僧の無言信（『増集続伝燈録』巻六に伝あり。続藏経巻一四二―四五七c）の詩集『園夫』後に名をかえた『奇葩』については、詳細は不明であり、この序文も円悟の詩集につけられたものか、あるいは出版とは無関係に記したものかもわからない。正統藏経の所収の『枯崖漫録』にも、景定四年（一二六三）四月に題した林希逸の文があるから、この序は『枯崖漫録』の序ではないと思われる。

（ホ）臨濟宗その他

（36）東山長老語録序

宣城太守史館刁公景純、始闢東山宝恵仏寺、為禅居。疏召海恵師居実、以主之徇衆欲也。師東陽右姓、双林浄徒。少遊諸方、遍参知識、最後得法於琅瑯恵覚禅師。世所謂臨濟宗門、而南院後裔者、師其流也。自洩叢林、宣揚仏道、一音既演、四衆畢臻、虚谷洪鍾、有来斯応、量根器之深淺、隨機縁而引導、晨咨夕叩、虚往実帰。如是累年、大振宗旨。雖道本無体、非文字談説之可明、而人亦有言、故応対酬酢之不一。于是有升堂答問、洎入郡掲榜等語録三卷伝焉。其説曰、庶品万形、同出一性、無古今遠近之別、無高下細大之殊。達其指帰、則六合内外、不離平方寸、局於形器、則一念起滅、已隔於多生。至人冥観、動与理会、以為独善、不若利人、以心伝心、其来有自。後之学者、返本循元、一悟真空、無復余事。如深夜出、曉迷塗得帰、非敢黙黙不伝。此無量善知識、所以祖述於玄綱。而大資政南陽公、所以不吝於言説也。公以文章器業、翊亮三朝、入輔出藩、自蜀移越、每経綸制置之暇、教條宣布之余、游心定慧之門、得意言象之表。於是禅流輻輳、争望門庭、迅機電激、動形篇什。其在劍南、則有与峨眉山白、泊郡僚府佐、往復抑揚、及拈提古語、別為兩集。其在鎮東、則有与法雲重喜、唱和雜述、幕府紀錄、鑣於豐碑、秀句英辞、播在人口。叢林駕説之盛、不愧於昔賢、宰官倡導之風、復見於

今日。某忝隣對境、稔熟傳聞、限有帶水之遙、末由丈席之侍、蒙寄墨本、實會初心。未幾、令姪先輩東來見過、因語及此、且曰、嚮之兩集、有蜀州吳醇史君秘閣文与可、作序印行。今效唱和石刻之外、復盈緗帙、亦將鏤版見屬冠篇、某游公之藩、蓋有年矣。聆師之譽、固無間然、不見異人、既得書而啓發、以為作者、宜序事以著明大、凡偈頌賡載摠若干首、其余覲面高談、隨機縱弁、不立於文字者、則不在焉。昔莊生之得惠施喜、有忘言之對、謝安之与支遁、將期塵外之狎賢德相、值今古同風、況公夙殖德基、明見仏性、入游戲三昧、超円頓一乘、闢稽山之道場、付慧照之適裔。彼上人者、難為酬對、得大檀越、共為証明、異時揮塵之間、皆契投針之妙、人境不奪、照用同時、賓主歷然、言語道斷、自非涉異境、自是己家消、搖以遊造次。於是其於道也、不亦広矣。其於言也、豈可已乎。門人某等、以予於景純、有心照世交之契。於実師、為道存目擊之知。遠詣京師、見求序述。予以謂宣城山水之郡、古今故実之伝賢守高人、往往相值。昔唐相裴休、為廉察、嘗致黃蘗運公、於開元道場、以談性理故、有伝心法要。休自序之。今景純作鎮、又為実師、崇建法席、以唱宗風、復有效録、見屬鄙文予、師心有年、闢道來達披文游目、茲見弁才之不窮、覽今懷昔、良嘉名德之相遇、姑用讚歎、思有激揚。夫至理玄微、見於言者、已為粗迹、一時對問。序其事者、豈尽端倪。兩皆虚談、斯亦奚用。然而空有互見、語嘿對持、非因事而顯発、

孰見道之著明。廁足致泉、無用所以為用、因蹄得兔、忘言而後可言。強為標題、已慙聲綴、默識之士、願姑忘聽焉。(蘇魏公集「卷六七」七丁左「一〇丁左」)(四庫全書珍本四集 駒図032—20—142)

蘇頌(一〇二〇—一一〇一)の『蘇魏公文集』七十二卷に所収された一文である。東山居実の名は燈史類にみいだされないが、序文によると、汾陽善昭—琅瑯惠覺と承ける臨濟宗に属する人で、長水子璿(一〇三八—一〇八八)と兄弟弟子となる。東山とは、刁景純つまり刁約が開創した東山宝恵仏寺のことである。序文中には、文与可つまり文同(一〇一八—一〇七九)が序文を付して開版した二卷本の禪籍にもふれているが、現存しないので、よく関係がわからない。『東山長老語録』は三卷であつたと思われる。

(37) 石門進禪師語録序

進禪師、中葉鼎之毒、活陷石門山中、帶累二十人、同入地獄。天人怨怒、火焚其廬、土燥石焦、草木百年、無生氣。樗寮寺丞、請命於天子、為開地獄門、貸其過惡、於已失人之後。住練溪仁翁、得瑞巖才公、公所抄、師末後款案、於故紙堆中。大書深刻、暴揚其惡於叢林。予読而歎曰、此老受於人者毒、施於人者亦毒。其言如刃上蜜、如酒中鴆、如塗毒鼓、如生鉄蒺藜。當時中毒而死者、亦豈二十人而已。掩耳而去、赤脚過溪、其毒亦発於草鞋絆樹樾之時。吁可畏哉。才公受毒最深。宜不能掩其惡。練溪果何所為、而暴揚之、殃害乎人、未有了日。此予之所甚憂也。(「柳塘外集」卷三「一三丁左」一四丁右)

(四庫全書珍本五集 駒図032—20—1888) (参照「無文印」卷九)

無文道璨の『柳塘外集』に所収の一文である。石門守進は、「葉鼎の毒に中る」とあるように、首山省念(九二六—九九三)の弟子の葉鼎帰省に嗣法した人で、『建中靖国統燈録』の目録(統藏経卷一三六—三a)に名のみ見え、浮山法遠(九九一—一〇六七)と兄弟弟子である。守進の伝は不明で、この石門山も明州(浙江省鄞県)とも衢州(浙江省衢県)とも、目録と本文で異っていてわからないし、練溪仁翁(公)もわからない。瑞巖智才は石門守進の弟子として、『建中靖国統燈録』卷八(同—七c)に語があり、この智才によって編集された語録であろう。守進に語録があったことは知られない。また弟子は二十人もあったとされるが、その名がわかるのも智才だけである。

(38) 翠巖真禪師語録序

石霜山中、有三角虎。孤游独坐、万木生風、至於千里無人、草深一丈。有一人、料其頭而得道、是為黃竜慧南。有一人、履其尾而得道、是為翠巖可真。南之子孫、江西湖南、若揭日月、而真得子、晚所乳之子、是為滌山道人慕喆。林棲谷隱、堅密深靜、霜露果熟、証聖推出、枯木朽株、雲行雨施。然後翠巖之道光明。蓋翠巖之入石霜、適遭一吼。凡聖情尽、参承咨決、徹仏徹祖、行住坐臥、亘古亘今。行川之水、無不盈之科、走盤之珠、無可留之影。十聖三賢当路、亦須草偃風行。四方八面俱来、無不投戈散地。金章玉句、具在可知。然明月夜光、多逢按劍。陽春白雪、難為賞音。維黃竜罷参之客、必

遣之曰、百鍊真金、真須入翠巖鑪。今坐鎮諸方、竜吟虎嘯者、無不称翠巖室中之句。以接大根器凡夫、而叢林号為真点胸者。蓋同門数老、雖目視耽耽文采炳煥、似從慈明法窟中来。實不解石霜上樹之機耳。各夢同牀、不妨殊調、冷灰爆豆、聊為解嘲云耳。(「予章集」卷一六—二八丁左—二九丁左)(四部叢刊駒図032—T12—204)

黃庭堅(一〇四五—一一〇五)の『予章黃先生文集』三十卷に所収された一文である。この序文は、『統古尊宿語要』卷一(統藏経卷一一八—四二七a)にも存す。『統古尊宿語要』は、語録の抜萃であるので、一応ここに記載し、同じ黃庭堅が撰した『翠巖悦禪師語録後序』(「予章集」卷一六—三一丁左—三二丁右)は、『古尊宿語録』卷四十—四十一の末尾にあるが(統藏経—三四九c)、語録の全体と考えて省略した。翠巖可真(一〇六四年示寂)は、真点胸と呼ばれ、汾陽善昭—慈明楚円と承けて、臨濟宗に属す。

(39) 大滌喆禪師語録序

喆禪師、烹仏祖鑪、鍛十地鉗椎、坐大滌山、孤峯万仞。倒用魔王之印、追大軍於藕絲孔中、全提金翅之威、取毒竜於生死海底。擊毒塗鼓、死却偷心伝法、蝮蛇命、与雪山藥、吐却室中密語、野狐涎。若相如之璧無瑕、不但二十五城、十方一契、尽為祖業。驢負鱗角、羊蒙虎皮、来者崢嶸、皆納敗闕。向滌山去者、合如是去。從滌山来者、吾則有以驗之。昔石霜山中、生二虎。其一為黃藥南。其一為翠巖真。黃藥之虎、乳数子、皆哮吼一方、弭伏百獸。而翠巖之虎、生一夔、是為喆

禪師。余不能尽贊其道。而以印於余心者、書之瀉山語錄之後。後世僧中有董狐、深知正法眼藏之樞紐。能持直筆使雅頌、各得其所、必將有取於斯文。〔予章集〕卷一六—三〇丁左—三一丁左) (四部叢刊 駒図032—T12—204)

同じく黃庭堅の一文である。大滙慕喆(一〇九五年示寂)は、序文中にもみえるように、石霜楚円(九八六—一〇三九)が二人のすぐれた弟子を出したが、その孫にあたる。つまり二人の弟子とは、その一人が黃竜慧南(一〇〇二—一〇六九)であり、一人は翠巖可真(一〇六四年示寂)であって、黃竜下に多くの弟子が活躍し、黃竜派の全盛を迎えるのである。前の序文の翠巖可真の下に出たのが、大滙慕喆であり、師資共に全録は存しないことになる。当時、同じ石霜楚円下の楊岐方会(九九二—一〇四九)を数えないところは、石霜下の動向がうかがえて興味あるが、後には楊岐派下が臨濟禅を代表することになることは、周知のところである。慕喆は、賜号を真如禪師といい、潭州の嶽麓山、慧光、大滙山と東京大相国寺知海禪院に住している。曾布(一〇三六—一〇七)が塔銘を撰したというが、伝わらない。『建中靖国統燈錄』巻十四、『嘉泰普燈錄』巻四などに語と略伝を伝え、特に『禅林僧宝伝』巻二十五には比較的詳しい伝記を伝えるが、語録については述べない。語録が存したと思われるのは、拙稿『宗門統要集』について(上)〔駒沢大学仏教学部論集第四号 昭和四十八年十二月〕でみたように、多くの著語が残っていることから推測できるのである。

(40) 燈禪師語録叙

余頃在中陶、嘗与李濤・師淵、論当世之名僧。師淵語余曰、吾所見祖印者、有道者也。蚤以機縁、為世導師。晚乃退居都城之等覺。望其容貌、如秋際木、聽其弁説、如夜半潮。始窃以為未始出吾宗而終也。如一葦杭大海、惕惕環視、莫見畔岸。後數年、復遇師淵於都城、問其所謂祖印者、而將訪焉。則曰、寂滅久矣。出其所集語録二卷示余。余然後知師淵異時之言、尚其可以言者。師淵喜、余不親炙而契也。曰為之序、以發其端可乎。余以謂聚塊積塵、本無取捨、鷄鳴犬吠、元自分明。猥於其間、指以示人。師已不得、為無過者矣。其徒善義又從而録之。師淵又從而鏤板以伝布之。余又從而為之叙以冠之、是蛇足也。惡乎、可雖然以此為可、不可以此為不可、亦不可論其可、不可亦不可。師名智燈、婺州金華人。道吾法真之子。臨濟之孫。祖印、蓋其師号云。〔道郷集〕卷二八—一一丁右—一二丁右) (静嘉堂文庫所藏本)

鄒浩(一〇六〇—一一一一)の『道郷集』四十卷に所収される一文である。智燈の名は、燈史類ではみいだせない。ただこの序文によって『五燈全書』巻二五(統蔵経巻一四〇—三一二a b)は立伝している。序文のみによって知られるところでは、婺州金華の人で、法を慈明楚円—道吾悟真と承け、都城の等覺に晩年住したとある。語録は二巻であり、智燈の弟子の善義が編し、師淵が開版に努めたとしている。また祖印とは師の号であるという。

(41) 智京語録序

新化承熙長老明覺大師智京、嗣法于普融平公。盖臨濟宗也。

平之道盛行乎。崇・觀・政・宣間、京執侍最久、深得師伝、分化流通、所至縁合。住承熙之八年、書來謂予曰、平日拈提唱道、随和而応、本無一語。而参學者、係風捕影、遂成痕跡、是則有也。不識可為発揚、以慰二三子之勤乎。予曰、達摩面壁九年、如死灰枯木、及対姫光、安心之間、文采遂彰、或隱或顯、固無緘口、齟舌以終。其身者然、世遠道散、人人説法、沛如雲雨、浩若江海、紙墨伝布、亦云多矣。乃欲与面壁同符、此達者、所以莞然、而弗信也。子既紛紛言之、子之徒又從而記之。予又為子序之。于少林之旨、豈不大有徑庭乎。雖然言心聲也、言是事、而曰、我未嘗言不言是事、而曰、我未嘗不為汝言。自昧者聴之、如嬰兒未孩、易耳目而不知也。自達者觀之、明鏡之中、豈有遁形哉。故伝燈録所載、一千七百余、人若深若淺、即言可判、如物之經乎、權衡度量、焉可誣也。具眼之士、因予序、以觀斯集之言、因其言、以求明覺之心、因其心、以求書記未参之所契、黃梅夜半之所付、少林断臂之所証、亦若是耳。〔斐然集〕卷一九一七丁左（一八丁左）（四庫全集珍本初集 駒図032—20—291）

胡寅（一〇九八—一一五六）の『斐然集』三十卷に所収された一文である。智京は、翠巖可真—真如慕喆—普融道平と承ける臨濟宗に属す。燈史類では、『嘉泰普燈録』の目録（統藏經卷一三七—一一a）に名のみをみいだす程度で、詳伝はわからない。普融道平（一一二七年示寂）が東京の智海寺などで活躍していた崇寧・

大觀・政和・宣和（一一〇二—一一二五）の間、師につかえ、新化（湖南省）の承熙寺や漳州（湖南省）方広寺に住持し、明覺大師（禪師）と号した。明覺は、自号か賜号か諡号か不明で、承熙寺には八年以上住持していたと思われる。語録の内容や分量等はわからないし、語録の存在も知られていなかった。

（42）太原昭禪師語録引

慈明与瑯琊覺、皆法兄弟。其扶臨濟一枝。慈明而下十余世、得玄冥顓禪師。瑯琊而下、亦十余世、得虚明亨禪師。玄冥風岸孤峻、無所許可、寧絶嗣而不伝。虚明急于接納、故子孫滿天下。又皆称其家、如慈雲海・清涼相・羅漢汴、与法王昭公皆是也。屏山、為虚明、作墓誌、以為二公伝与不伝、雖異而其道並行、而不相悖也。正大初、予在史館、昭公属予求書、屏山所作銘、于礼部閑閑公。公初、以目疾、為辭。予請之堅公。因問、法王皆来、有何言句。時昭公方為虚明、作塔于法王之朝臺。有偈云、以塔為身、以鈴為舌、万仞罔頭、横説豎説。予為公拳似。公欣然曰、銘安在我、當為書之。盖師家父子為時賢、所称如此。歲丁酉八月、予自大名、還太原。師之徒蔚某出師語録、求作序引。吾家微之有言。若仏法師、當為予説、而予不當為師説、故畧以数語遺之。太原元某引。〔遺山文集〕卷三七—一四丁左（一五丁左）（四部叢刊 駒図032—T12—232）

元好問（一一九〇—一二五七）の『遺山先生文集』四十卷に所収された一文である。宋というより、元好問は、憲宗の七年（一二

五七)の九月四日に没しているので、金代に属するが、南宋滅亡以前であるから、ここに収めた。太原昭は、虚明教亭(一一五〇—一二一九)に嗣法した人とあり、虚明教亭は瑯琊慧覺の法系に属すと序文に述べている。詳しくは、瑯琊慧覺—泐潭曉月—毘陵真—白水白—天寧党—慈明純—洞林宝—虚明教亭と承ける。序文中のように十余世はない。また玄冥顚について言及するが、この玄冥顚は『増集統伝燈録』巻六の末詳承嗣に「慶寿開山第一代玄冥顚」(統藏経巻一四二—四五九b)として立伝されている人である。この序文によって、慈明楚円(九八六—一〇三九)の系統であることだけは確かめられる。太原昭は、法王寺に住したように、慈雲海・清涼宏相・羅漢汴などの兄弟弟子がいる。正大(一二三四—一二三一)の初に、序者と太原昭とは出合っているし、序文は丁酉(一二三七)の八月の頃に撰せられているから、太原昭の大体の活躍時代がわかる。序文をたのんだ師の徒の蔚は不明。

(43) 法嗣未詳

(43) 寧国長老語録序

趙州柏子、果是分明、靈雲桃花、更無疑惑。一宿不為迅速、九年未是遲延。万法只是一門、千口豈有兩舌。寧国堂頭、宗乘東道、覺路南車、儒釈兼通、死生了達。包藏無礙、常発大慈悲心、度接有縁、默伝正法眼藏。如某愚昧、願師提撕。済我無底舟航、還我未生面目。深悟筌蹄之要、証比上機、姑有土苴之余、寓諸方冊。(「忠簡公集」第六—二丁右)(「金華叢書」静嘉堂文庫所蔵)

宗沢(一〇五九—一二二八)の『忠簡公集』七巻に所収の一文で

ある。同巻六にある「請寧国再開堂疏」(二丁左)によっても、寧国長老の諱は、不明であるが、前号の(20)の「宗禅師語録序」を一応、黄竜派の寧国道宗の語録と考えて序文を前に掲げておいたので、この同じ語録にあるいは、この序文も付されていたのかもしれない。(20)の序を書いた張耒(一〇五四—一一一四)も、宗沢も同世代の人であるから大過はないと思われるが、推測の域を出ない。

(44) 德瀾禅師語録序

有大空谷、捷出万響、洪纖美惡、高下疾徐。一一与声、等無差別。方寂方応、何所從來、方応方寂、何所至去。一切仏祖語亦如是。若作義見、非第一義。德瀾長老、住在高臺、四面皆山、不知幾谷、即衆谷響、同作一音、普聞十方、随類解説。諸具眼者、当自知之。如或不然、是何等語。(「道郷集」巻二八—十丁左)(静嘉堂文庫所蔵本)

鄒浩の『道郷集』に所収された一文である。德瀾禅師については、法嗣未詳で、燈史類には名はみいだせない。住持した高臺とは、おそらく南岳の高臺寺であって、黄竜慧南下の仏印禅師宣明が住持しているが、この人と同時代で、同系統であろうと想像される。なぜならば『道郷集』には多くの慧南下の序文があることを前号でみたので、同じ集団に属すと考えられるからである。

(45) 方広耆老語録序

湖南善知識曰從耆。嗣福嚴奉老子。住方広聖道場。其骨從蓮峯孤高、其氣徹靈源清潤。金燈現処、普然無尽之燈、仙磬鳴

時、不繫有心之磬。阿羅漢既已避席、諸鬼神自然運糧。大丞相曾公、閱人多矣。許以為道友、孰能先焉。李習之、親訪藥山、豈惟忘勢。裴公美、久延黃蘗、端為明心。傳播諸方、輝映前古。伊予南竄、以至北歸。初見師於華光、不可得而親也。旋見師於明水、又可得而踈乎。超越見聞、靡容擬議。其徒乃集師緒語、屬予冠文、聊追空谷之音、繪以捕風之手。直須一千里外、不得錯舉。何待三十年後、此話大行。〔道鄉集〕卷二八—十二丁右左〕（靜嘉堂文庫所藏本）

同じく鄒浩の一文である。方広從誓が福嚴奉に嗣法したと序文に述べるが、これらの人々の法系は不明である。いまのところ語録の内容等がわからないうに、燈史類にも、その名をみいだせない。

（46）跋尼光語録

予登予章西山、其上蓋有光禪師塔焉。及來成都、又得師所說法要、博弁奇偉、雷霆一世。猶有蜀忠文公、立朝堂堂、不撓於死生禍福之遺風。信其為范氏女子也。笠沢漁隱陸某。〔渭南文集〕卷三一—一〇丁左—一一丁右〕（四部叢刊 駒図032—T12—222）

陸游（一一二五—一二〇九）の『渭南文集』五十卷に所収の一文である。陸游は笠沢漁隱と号した。西山尼光はよくわからない。忠文公の号でよばれる人は多くいるが、俗姓が范氏で蜀郡公に封ぜられた人となると、范鎮（一〇〇八—一〇八八）のことであろう。その女が出家して、西山尼光と呼ばれたらしい。淨因法成

（二〇七一—一二二八）の弟子に淨智大師慧光がいて、宣和三年（一二二二）に東京妙慧寺に住している。また黃裳（一一四六—一一九四）も忠文公とよばれるが、この人の女が、定光大師妙道とい、大慧宗杲に嗣法し、温州淨居寺に住している。この跋文によるかぎり、後者ではないようだが、前者の場合、俗姓も略伝も不明であり、范鎮と慧光の結びつきも不明であるから断定しがたい。

（47）題西峯豁禪師雜録

右西峯豁禪師禪錄一冊、元本淆乱差訛、稍加訂正、而歸之寺。今定陵宸章、止存石刻。元豐郡守魏綸跋語、疑太和宰黃庭堅代作云。紹熙甲寅重五日、周某題。〔文忠集〕卷八〇—一二丁右左〕（四庫全書珍本二集 駒図032—20—681）

周必大（一一二六—一二〇四）の『周益国文忠公集』二百卷に所収された一文である。西峯豁とは、奉先道琛の弟子の廬陵西峯豁でなくて、吉州西峯の祥符寺（もとは宝竜という）雲豁で、賜号を円淨禪師という。その理由は、吉州（江西省吉安県）は魏綸のおさめていた地方であることや、祥符二年（一〇〇九）に雲豁と真宗皇帝の関係があるところから、宸章が結びつく点などがみられるからである。雲豁の嗣法は、二説あって、雲門文偃（八六四—九四九）の弟子の清涼智明か雲居融のどちらかだといわれている。『嘉泰普燈錄』巻一の略伝では、清涼に見えて、大悟し、印可を蒙ったようである。語録も編集の十分整理されていないものであったと思われる。黃庭堅（一〇四五—一一〇五）が代作したとする魏綸の跋語は、定陵（河南省舞陽県）の石刻に存する宸章の

ことのみであらう。題語の成立は、紹熙五年(一一九四)のことである。

三拈古・頌古集その他

(48) 拈古頌序

甚哉、物之勝于人也、久矣、万利舞于前。其心未嘗不艷然、願得悉厭於己者、所欲一動、厥本遂失、而不可求。既爾將何護持、而復能固之者邪。彼根種鈍下、迷謬惛塞、入類既淺、余習未断者、故不足与道。此嗟夫、世之術智巧、挾姦妄、假名教、冒資級、養己謂無輩、視衆若不覲者、尚亦睢盱惛惛、不自省覺。其神已為有力者、奪去淪虚浮空、余止腐殼、猶務以氣自侈、變改形狀、標立高遠、誇耀庸惑。殊未知一息絶續、百骸附紵、則隨業散墮、灑隸群趣、沈幽没冥、無可洗脱奈何。日日戴此重障、了不明悟、此尤為最可憐者也。嗚呼、幻美溺人之深也。如此其有能于其中視之、謂非己之常所能有。故不切其毒、若水之不能濡膏之、不能塗者、間有人焉。資政殿大學士趙公、以台鼎之重、再尹於蜀、蜀之人、三十年中、凡五見公矣。求公之迹、終未能得。或曰、公之位既愈高、而其色若愈下、謙靜恬懿、無一易德者何耶。曰、是亡他也。脩真達元、總了妄法、物有不能勝之者矣。所以常拋三旌之榮、饗万鍾之厚、固如飄風值劍、暫有一呷。彼又豈能轉之、如俳兒顛媚、執綸曳匄、俛仰顛側、諛諛伏寵、一由於他人所役邪。公既以無事為治。其下亦各以無事。安其轍化既成矣。因萃會古

人禅門語録之深隱者、拈而頌之、凡百篇。揭月昏衢、擊霆與蛩、瞽者瞽者、悉使覺知仁人之言、所利信博、一得永得、公之志歟。嘉祐紀禅師、出入公之門下。香山如滿、從白傳之遊。圭峯宗密、接裴相之論。得公所述。願布行之写鏤云。初属予為序。因為道公之髣髴云。時熙寧七年甲寅五月戊子日、謹序。〔丹淵集〕卷二五―二丁左(四丁右)(四部叢刊 駒図032―T12―133)

文同(一〇一八―一〇七九)の『陳眉公先生訂正丹淵集』四十卷に所収された一文である。序は熙寧七年(一〇七四)の成立で、戊子の日はないので、干支が誤っているか、月が誤っていると思われる。この『拈古頌』は百篇より成り、趙抃(一〇〇八―一〇八四)の撰述である。趙抃には『趙清獻公集』十卷の著述もある。趙抃は『嘉泰普燈錄』卷二十三に立伝され、雲門文偃―徳山縁密―文殊応真―洞山曉聰―雲居曉舜と承ける蔣山法泉に嗣法した人とされる。序文中に名前ある嘉祐紀は燈史類に名がみえないが、白居易と香山如滿、裴休と圭峯宗密の關係のように趙抃と交遊のあった人で、趙抃の嗣法の弟子と理解しなくてもよいと思われる。『拈古頌』の成立は、禅宗の著述史の中でも、早い時期に属し、禅宗の語録から抜萃されて、拈古、頌古が作られたとすると、汾陽善昭(九四七―一〇二四)が『頌古代別』三百則を作成して、まもなく士大夫によっても成立したことが考えられるから、大変重要な士大夫の禅理解の問題が提出されることになる。

(49) 空巖(明)頌集序

外不見有法、内不見有我、此空岳所以得名。然名字一立、則

空即有矣。短歌数十丈、長句三兩言、実其有也。空崖道人、

軒渠而言曰、大般若六百卷、重宣複演、数千言。其所詮者、

性空而已。文字語言、何嘗与空為礙哉。爾乃無說、我乃無聞。

謂此故也。諸君遺我、以無言之言、公当贈我、以無文之文、

空兮有兮、烏乎論。(「柳塘外集」卷三一七丁左一八丁右)(四

庫全書珍本五集 駒図032—20—1888)(参照、「無文印」卷九)

無文道璨の『柳塘外集』に所収された一文である。『柳塘外集』

では「空明頌集序」とあるが、『無文印』のように「空巖頌集序」

とある方がよいであろう。序文中にも、空巖が、空窟とか空崖と

表現されているが、空巖とは、おそらく杭州中天竺空巖有禪師を

さすものと思われる。空巖有は、圓悟克勤—護国景元—焦山師体

—天童智顗—径山如珏と承ける人である。この著作は、上堂法語

などではなく、偈頌のみで、短歌が数十丈と長句が三兩言あったと

されるが、分量は正確にわからない。卷子本の分量と考えるとよい

のであろうか。

(50) 賀知無聞頌軸序

大川老子、住浄慈之三年、於五百衆中、命東嘉知無聞、掌法

藏。江湖之士、美叢林之得人、大川之知人、説偈賛歎、百啄

並響。或謂、賛則賛矣。如彼上人之無聞、何殊不知、湖边花

柳、号称善聴。天風忽来、熾然宣説。無聞之聞、孰大於是。

有問此無聞法門、在大藏第幾卷。但向他道、五千四十九卷中

檢看。(「無文印」卷九、四丁右左)(駒図124—190—3)

同じく無文道璨の一文、『柳塘外集』ではなく『無文印』のみ所収

宋代禅籍逸書序跋考(二)(石井)

されものである。大川普濟(一一七九—一二五三)が臨安府浄慈
報恩光孝禅寺に住して、三年後に五百の弟子の中から選ばれた東
嘉の無聞知の頌集の序である。ただ印行されたものか、あるいは
印行を目的とするものかも不明であり、分量もわからない。また
無聞知についても燈史類には示さない。

(51) 悼仟(阡) 弁山頌集序

受帝者之命易、得学者之心難。弁山和尚之於天童、未奉詔也
群聚而迎之。既入滅也合詞而哀之。其得学者之心、不待問而
知矣。然余窃有疑焉。翠竇倚天、懸水挂石、老子未嘗起也、

而学者起之是執之也。太白横曉、万松鳴籟、老子未嘗死也、

而学者死之是誣之也。弁山果何修而得此哉。或謂余、子於弁

山、有一日之雅、弁誣解執、何惜筆端之口。余未知所对。管

城在側奮髯而作曰、衆怒難犯、幸毋累我。(「無文印」卷九、四

丁左—五丁右)(駒図124—190—3)

同じく無文道璨の『無文印』に所収の一文である。この書は、刊

行が予定されていたかどうかは別として、「頌集」とあるからま

とまったものであったと思われる。弁山了仟(阡)は、天童山の

第三十八世で、淳祐十年(一二五〇)十月十日に住持している。

了阡は、大慧宗杲—仏照徳光と承ける浙翁如琰(一一五一—一二

二五)に嗣法している。この序は、了阡の示寂後すぐに成立した

ものである。

(52) 石屏頌集序

洞庭石屏、在七十二峯間。自有天地以来、未有能見之者。惟

明覺老人、嘗見之於收視反觀之時、独倚長吟。瀾翻濤湧与太湖三万頃、更唱迭和。至今未已。廬陵石屏、不下妙高峯頂、徐步經行間、忽然見之、左顧則七凹八凸、右盼則四角六張。実与明覺老人、同一眼見。声称籍甚、大播叢林。一時名流、自北礪而下、為序為說、為四句偈、鋪張歌頌、積之成編。余取而閱之、不過曰高也大也方正也峭峻也。嗟夫、是豈真知石屏哉。之四者、石屏方置之腦後、中叢林而立。独当一面、捍禦風寒、使仏祖門庭、歲晚有所屏蔽。豈若他人依倚於是、憑藉於是、守一辺之偏見哉。石屏聞斯言也憮然曰、作如是觀如是見、如七十二峯横点頭何。余從而歌曰、石屏兮孱顔蹇、独立兮天地間、瞻望兮弗及、模写名状兮大難大難。〔無文印〕卷九、五丁右左(駒図124—190—3)

同じく無文道璨の『無文印』に所収の一文である。石屏については不明であり、雪竇重顕(九八〇—一〇五二)以来のすぐれた詩偈を残したようで、今のところ内容等も全くわからない。

(53) 嵩和尚頌序

歲甲寅秋七月、余自清涼、還太原。会乾明志会、出其法兄弟万寿嵩和尚頌古百則語、謾余題端。余往在南都、侍閑閑趙公・礼部楊公・屏山李先生、燕談每及青州以来諸禅老、皆為万松老人、号称弁材無礙。当世無有能当之者。承平時已有染衣学亡之目。故凡出其門者、望而知其為名父之子。雖東林隆高、出十百輩、而嵩於是中、猶為上首。其語言三昧、盖不必

置論。余独記屏山語云、東坡・山谷、俱嘗以翰墨、作仏事。而山谷為祖師禅、東坡為文字禅。且道、嵩和尚百則語、附之東坡歟、山谷歟。余亦嘗贈嵩山雋侍者学詩云、詩為禅客添花錦、禅是詩家切玉刀。嵩和尚添花錦歟、切玉刀歟。余皆不能知、所可知者、讀一則語、未竟覺氷壺先生、風味津津、然出齒頰間。当是此老少年、作拳子時、結習未尽爾。志公試以此語、問阿師、当発一笑。中元日、遺山居士元某引。〔遺山文集〕卷三七—一五丁左—一六丁左(四部叢刊 駒図032—112—232)

元好問の『遺山先生文集』に所収された一文である。元好問の塔銘類について以前少しく検討したこともあるが、現在のところ金代北方の禅の研究が十分できていない点もあって、万寿嵩、その兄弟弟子の乾明志、二人の師の東林隆高については不明である。曹洞宗の万松老人行秀(一一六六—一二四六)と比べられるすぐれた禅者であつたらしい。頌古百則をまとめたものであり、甲寅とは、憲宗の四年(一二五四)を意味し、秋七月に太原に元好問が帰り、その年の中元の日(七月十五日)に序文が書かれたのであろう。序文中に、黄山谷(一一〇四—一一〇五)は祖師禅であり、蘇東坡(一一〇三—一一〇一)は文字禅と評価している点は興味あるところである。

(54) 壁菴居士文集序

江都李氏、名族也、紹興間、名之從民者、尚多俊茂。余生晚、猶及識、将作監端民平叔、及其子泳、皆有詩声。又有名璜字

德劭者、平原公之從孫、將作之再從弟、少負雋才、而頗誕放、恥從進士舉、里人或譙之。則曰、我非不欲試、但恐奪爾曹魁爾。又嗤笑之。乃曰、爾曹不信、我將試矣。一試果魁維揚、後寓四明、筆力雄遭、人所罕及、時初脫兵人之厄、郡県庠校記文、多出其手、太守仇公泰然恣・周公元拳綱・潘公子賤良貴、皆一時名公、莫不低簪礼之、侍御史王公伯礼伯庠、為教官、与之游最厚。蓋文字之友也。明多禪刹、往來其間、或以書來云、孟信安欲招為壻、資送特豐、且可得官、擲于地曰、老大乃復為此耶。竟不報、既不得志場屋、蕭散骸骸、以終其身。不娶無子、晚從宏智禪師、于言下有省。益耽內典、以其筆耕之余、買田一頃、施于阿育王山、使奉嘗我写照、而題其上、至今留水陸堂中、遇薦羞則為設伊蒲、其贊有云、分明便是龐居士。又卻無人壳罩籬、不可謂無所得、然亦可哀也已、嘗見侍御、言德劭病革、往候之、問向為文用僧騰客為何事。曰、候景臺城事也。又問、平日了達、今何所見。曰、都無所見、但覺神氣消散爾、出書一囊。乃其遺藁、猶顧而言曰、以屬吾子、勿窃吾詩文以為己作、平時相忘、方緜儼時戲調尚如此、里人戴伯与權、雅士也、託館王氏、慕其文名、從侍御諸子借囊出藁而手編之、又多殘紙、斷壞不可尽錄、故所存十之二三。僅得詩文雜著幾二百篇、釐為十二卷、俾余為序、久未暇及、嘗取其白氏長慶詩譜錄、寄吳門使君李諫議、既為刊于集後。又索其詩文。且曰、近為建寧、當為版行。余喜其文之

將就泯沒而有伝也。為序其大概而記之。嗚呼、世之騷人才士、耽嗜成癖、哦詩屬文、皆欲有聞于世、而因仍埋没、与草木同腐、不得以一語自見。由古以來、不知其幾、德劭之集、藏于侍御之家、伝于伯与。又因余与諫議而行于世、玆非幸歟。若其詩句之工妙、文体之高勝、出入古今、追配前良、不待余言、覽者当自知之。槩菴其自号云。〔攻媿集〕卷五三一七丁左（一

九丁右）（四部叢刊 駒図032—T12—217）

樓鑰の『攻媿集』所収の一文である。槩菴居士を自号にもつ李璜、字德劭の文集に序が付せられたものである。全部で十二卷あるというが、未見の文献であって、この序文によって、宏智正覚の下で大悟したことがわかる。士大夫の文集の序によって、禪者との交游が知られるものも沢山あるのかもしれないが、この方面はまだ十分に検討していないので、今後の課題として残しておきたい。

（未完）

一九七三・七・二二